

◎水と緑と野生生物をよみがえらせ豊かな生活都市をつくる政策

■第4グループ

1 対立から共生へ

△都市と自然▽という命題は、共生概念としての把握が常識化してきたが、かつては対立概念としてとらえられてきた。都市化⇨人工化であり、都市公園は別として、都市に自然や農地はいらないという都市観が主流を占めていた。野生動物に対しては更に冷たかった。

都市づくりの底流は変わっていないが、国レベルでも「多自然型川づくり」、「エコロジープーク」、「エコシティ」、「環境共生住宅」、「環境保全型農業」等々、新メニューが次々に打ち出されるなど、流れは動きつつある。都市計画等の制度的改変はまだ不十分であるが、少なくとも理念的には都市の「持続的成長」や「成長管理」がキーワードになり、その一環として△都市と自然▽の共生思想が社会的認知を受けるようになってきたことは確かのようなのである。

ところで、政策の目標や手段にいくつかの選択肢があれば、政治判断、予算規模、達成

期間等を組み合わせ、体系化することによって政策化が可能である。しかし、後述するように、本テーマには目標、手段に選択肢がなく、オーソドックスな計画手法が適用できない。私たちは、政策提案をたんなるアイデアに終わらせないために、まずはフィールドを歩き、自然観、都市観の共有化を図りつつ（居酒屋で?）、計画プロセスそのものの検討から入った。

2 水・緑からふるさと生物へ

総合計画等において、自然環境がテーマになりはじめてまだ歴史は浅いが（概ね七〇年代以降）、その中でも取り上げ方に変化が見られる（図一）。

傾向的に述べれば、まずは、直載的な「水と緑」というとらえ方であった。「水・緑」のもつイメージ、オープンスペース、景観、親水といった自然の個別的機能が対象になっていたといってもよい。文字通り、「水と緑のまちづくり」というキャッチフレーズも流

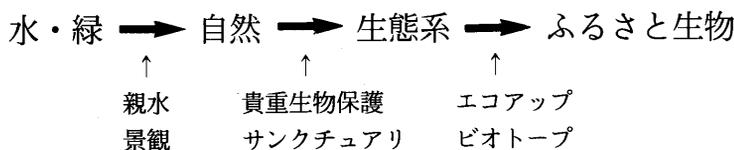
行った。次いで、「水・緑」をもう少しストーリーにというところで、「自然」というカテゴリーが導入される。

とはいえ、「自然」という言葉は、あいまいな概念である。様々な解釈ができる。徐々に収斂されていき、「生態系・エコロジ」といった視点が強調されるようになる。それも当初は、生態学的な貴重性、あるいは生物循環や生態系ピラミッドなどの生態学の基礎概念が中心となっていた。

アメニティ意識の高揚もあって、生活環境としての貴重性が問われるようになり、人為の加わっていない天然自然か、それとも二次的な田園自然かに論点が移る。都市自然としては、ありふれた平凡な自然ではあるが、アメニティ性が高く、その原風景でもある後者が評価されるようになる。田園自然の大きな特徴は、トンボやホタルをはじめとした身近で親しみやすい野生生物の生息環境であるという「ふるさと生物」の宝庫性にある。

さらに、エコアップ（環境のエコロジカルな改善）などの環境整備の段階に入ると、田

図一 計画における自然観の傾向



- 1 対立から共生へ
- 2 水・緑からふるさと生物へ
- 3 追加メニューから総合的施策へ
- 4 象徴的事業
- 5 新規モデル事業
- 6 パートナーシップによるエコロジカルシティづくり

園自然の評価基準が問われるようになり、整備目標としての「ふるさと生物」が導入されるようになる。ホタル、トンボ、メダカ、カブトムシ、オオムラサキなどである。今日の段階である。

△水・緑―自然―生態系―ふるさと生物△
の流れは、抽象から具体への移行であり、環境政策の進展の道筋でもあるが、まだ十分ではない。具体的な空間整備では有効であっても、「ふるさと生物をよみがえらせる」と言うだけでは、方向性は見えても計画目標とはなりにくい。

計画目標の検討には、何よりも過去の生物情報が欠かせないが、その生物情報がきわめて不足している。横浜では、急激な都市化の始まる六〇年代がひとつの目安になるかとも思われるが、どこに（場所）、どのような生物が（種）、どのくらいいたか（現存量）について、体系的な情報がない。研究も、ありふれた普通種については遅れており、生息環境の空間構造も科学的にはよくわかっていない。

総合計画のトータルな目標イメージを象徴する生物種を、△比較的の小規模な面積で自生可能なホタル・トンボ・メダカなどの小動物にするか、数十〜数百ヘクタールは必要なキツネ・オオタカ・オオムラサキを指すか▽、△絶滅種の復活を目指すか現存種で考えるか▽、△シンボリックな貴重種か取って遊べる普通種にするか▽、その基本方針もよく見えてない段階である。とはいえ、目標水準がさちさと決まるまで手をこまねいていてよいものではない。

3 追加メニューから総合的施策へ

さらに手段が見えない。野生生物の保護、共生において、そのことを直接の対象とした単独のサンクチュアリやビオトープ（野生動物の生息空間）整備事業でなしうることは限られている。新規メニューをいくらか追加しても事情は同じである。もちろん、モデル効果はそれなりに持っている。しかし、モデルはモデルでしかない。

これまでの行政計画は、「新しい施策には新規メニューで対応」というパターンに慣れすぎているように思える。既存の枠組みに踏み込まず新しいニーズに応じていくには、やむを得ない選択であったかもしれないが、見直しの時期にきている。

ことに都市の自然環境にかかわる課題は、都市の成長や土地利用と密接不可分の関係にあり、環境プロパーな施策でできる範囲はごく限られている。公共事業に環境整備を付加するだけでなく、都市計画制度の見直し、福祉や文化政策とのリンクをはじめ、総合的に展開される必要がある。

特に重要なのは、ダウンゾーニングを含む土地政策の抜本的見直しであろう。挑戦してみたいテーマであったが、力量不足に加え、現実には景気対策で規制緩和が議論される状況にあり、当面の政策提案にはなりそうにないこともあって、別の切り口を模索した。具体的検討フローは、図1-2に示す。

4 一 象徴的事業

① エコ・ミュージアムと自然史博物館

横浜の緑被率は約三〇％であり、自然の豊かな都市とは言えないところまできている。だが、生きもの空間としてはなかなか捨てたものではない。

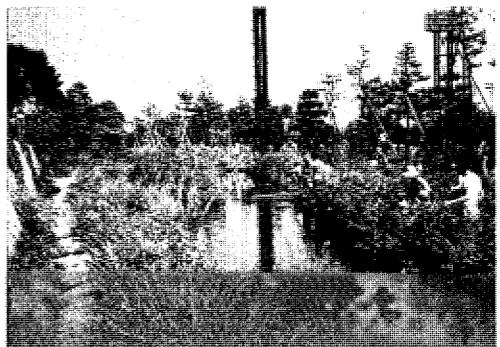
個体数は激減したとはいえ、ホタルをはじめキツネ、タヌキ、オオタカ、国蝶のオオムラサキなど、全国的に希少化、貴重化している野生生物が、山地的でないこの横浜に住み着いている。文字通り身近な都市自然で、これほどの生態的質を持っているところは、大都市では珍しい。

生物生息環境の器、ビオトープをつくっても、そこにやってくる生物がいなければ、効果は半減する。帰ってくる野生生物がすぐ近くにいたりということは、エコアップ事業の最大の抛り所となる。

横浜の都市自然の生態的質の高さは、緑の七大拠点に見られるように、数百ヘクタール規模の水と緑の一体となった「谷戸」（やと）が、各所に残されていることに由来している。谷戸田、雑木林の里山、湧水を集めたため池、源流の小川、多孔質環境の農家、大木の屋敷林、土の農道、そして多様な日照・風・気温をもたらす複雑な地形等がワンセットになった谷戸環境は、ふるさと生物の生息空間を凝縮したものであり、それ自身、自然と農が長い歴史をかけてつくりあげてきた最高の野生生物の博物館といって良い。谷戸は、市内河川の源流域でもある。

そこには、原生自然に在るような貴重種は少ない。しかし、生活文化を形成してきた親しみやすい生きものは豊富に在る。壊せば復元することの困難な環境であり、横浜の歴史

本牧市民公園トンボ池ザリガニ釣り大会



図一 水と緑と野生生物をよみがえらせ豊かな生活都市をつくる政策 検討内容概略

背景 急速な都市化による自然環境の大幅な減少の中で、経済的豊かさや都市の利便性だけでない自然とのふれあい、うるおいとやすらぎのある生活環境への高い要求

目標 丘、海、川などの自然環境を活かし、都市に水と緑を野生生物をよみがえらせ「自然と人間が共生する快適な都市環境」をつくる

テーマ（論点）の方向性の確認—都市生活の「快適性」とは何か

4つのテーマ（論点）の設定、テーマ毎の施策、事業の提案

1	<p>水</p> <p>＜川づくり＞ 川辺の保全や農地の保全／河川景観保全・形成制度の創設／緑の河岸づくり（土手、植樹）／瀬や淵、蛇行の保全・復元／親水公園等の整備／川の駅づくり事業</p> <p>＜憩いの水辺づくり＞ 海岸公園の整備／海岸グリーンベルトの整備／海の遊覧ルートの整備（バイクルーズネットワーク—マリンステーションとルートの整備／港と運河をつなぐ遊覧ルートの整備</p> <p>＜水質浄化＞ 湧水地の保全／地下水の保全—浸透施設の普及（個人、民間、公共）／雨水の利用／個別・小規模下水処理水を川に戻す／街の小川づくり／河川浄化施設の整備</p>
2	<p>緑</p> <p>緑の七大拠点の保全／市民の森の拡大／自然観察の森の増設／エコ・ミュージアム／自然史博物館／横浜の在来種の植物園／自然体験のできる森・山の整備（宿泊可能な施設も）／原風景となる谷戸田の保全／緑の拠点のネットワークづくり／個性を活かした公園づくり／屋上緑化／学校のエコアップ／学校の小さな森、池、沼の整備／ブロック塀を生け垣に変える運動／各家庭の庭に一本の木を植える運動／街路樹の個性化</p> <p>競争力のある農業の育成、保護策の推進／安全で新鮮な農業生産物を市内出荷できる体制づくり／野菜等の市内生産物の「朝市」の設置／横浜ブランド米をつくる／ふるさと景観（谷戸）の保全／体験農園／市民農園／子供農園／農地法の改正（農地の貸し切りが自由にできる等）</p>
3	<p>野生生物</p> <p>タヌキ・キツネの共生モデル地区の設定／生き物緑地の設置／酪農体験農園をつくる／生物保護区の設置／野生生物のテーマ公園化（トンボ公園、野鳥公園、虫公園）／生き物とふれあえる場所づくり／ザリガニの取れる小川の復元、創造／おたまじゃくし、メダカの泳ぐ身近な水遊び場／釣りができる川／海辺の小動物が生息し、釣りのできる海の浄化／小さな池沼に生息する小動物の保護／街中に虫の川の復元／日本在来種の保護・復元／レンゲ畑等を残した花の摘める公園／ススキ野原などの原っぱの復元／草笛、葉の傘など植物で遊べる公園の提供／横浜在来の植物見本園（都筑自然公園）／街中に鳥を呼ぶ樹林、植栽の公園づくり／巣箱、水浴び場、餌台を設置し野鳥との共生をする（モデル地区、モデル校の設定）／野鳥観察公園を身近に整備する／渡り鳥の越冬地・中継地の保全、復元／公園、街路に食餌木を植える／野鳥サンクチュアリを整備／野鳥の専門家の育成とレンジャー活動の後援／鳥の道（エコロード）をつくる</p>
4	<p>市民参加</p> <p>エコロジカルシティ宣言／核となる施設の設置、誘致（自然史博物館、NGOセンター）／広報の発行、ビデオの製作／環境情報センター、環境情報ネットワークの整備／エコライブラリーの設置／環境教育主任を一校一人／一校100㎡自然生態園、学校の森づくり／横浜版自然観察プログラムの開発／環境大学の設置／環境関係施設、民間団体、地域団体での環境学習を進める／街路樹水やり運動／水辺のクリーンアップ作戦／雑木林応援団／昔のガキ大将・お転婆娘のいる公園／エコアップを全市的なムーブメントに／保存緑地の公開／自然体験交流による農家、農地の活性化</p>

政策目標

- I 未来に自然と文化を伝えたい
- II みんなで築く水・緑のよこはま
- III 自然の中でいきいき活動

施策事業の提案

- 1 象徴的事業
エコミュージアム／自然史博物館／川の駅づくり
- 2 新規モデル事業
身近な水源開発／エコアップ2010作戦／キツネ共生モデル地区／エコ農業育成／ビオトープ公園
- 3 パートナーシップによるエコシティづくり
エコロジカルシティ宣言／エコアップ運動／市民・企業環境保全活動活性化

一 特集・行政課題研修②水と緑と野生生物をよみがえらせ豊かな生活都市をつくる政策

と文化が刻み込まれた原風景でもある。

近年、田園環境を保全・活用する手法として、フランスで主に展開されているエコ・ミュージアムが注目されている。

「エコ・ミュージアム」という考え方は、フランスのアンリ・リヴィエール氏らによって一九三〇年代から提唱されたもので、エコロジー（生態学）とミュージアム（博物館）の合成語である。フランス語では、エコミューゼという。

定まった定義はないが、「一定の文化圏を構成する地域社会の人々の生活と、その自然及び社会環境の発展過程を史的に探究し、自然及び文化遺産を現地において保存し、育成し、展示することを通して当該地域社会の発展に寄与することを目的とする創造的野外博物館である」（新井重三）という。フランスでは、一九六八年より現在まで約五十カ所、その他カナダ、アルジェリアなどで設立されているという。わが国には八〇年代末に紹介され、山形県朝日町等で検討が始まっている。

横浜には、新治、寺家、矢指、舞岡、瀬上など首都圏でも有数の谷戸がある。それらが候補地となる。規模的には、谷戸を中心に百ヘクタールは欲しい。雑木林を象徴するオムラサキや小型ほ乳類の生息の他、ホタル、トンボなどふるさと生物の種の供給基地（ジーンプール）の機能を持たせるとすれば、その程度の規模は必要であろう。施設としては、観察・活用センター、発見のある楽しい径、様々なビオトープが考えられる。しかし、何と言ってもメインとなるのは、伝統的な農システムによって醸成されてきた谷戸の原風景

と、そこで育まれてきた野生生物であろう（図-3）。

課題は、土地の担保性と、伝統的な農システムを助成制度等によって再現するか新しいシステムを検討するかどうかである。都市型エコ・ミュージアムにはそれなりの困難さはあろうが、都市だからこそ必要だとも言える。同時に、「自然史博物館」もいる。歴史の遺産の保存館としてだけでなく、自然史と環境について情報の集積・発信施設として、あるいは環境教育センターとして、基礎的な都市施設である。都心立地型にするかエコ・ミュージアムの導入施設とするかは、今後の検討課題であろう。

② 川の駅づくり

横浜には、鶴見川、帷子川、大岡川、柏尾川をはじめ多数の中小河川がある。大河はないが、市民にとって川は身近な存在である。

都市の川は、まちの個性と風格を醸しだす顔として、また都市自然あるいはエコロジカル・コリドー（野生生物の移動路）の中軸として重要な存在である。

近年、横浜の河川改修事業にともなう環境整備は、いたち川、梅田川、和泉川、舞岡川などエコロジカル・リバーの先駆的事例として全国から注目されている。その多くが旧河道や公園や学校等と一体整備によって実現されたものである。現在、都市計画決定されている河川改修計画の法線では、環境整備に大きな限界がある。

また、中心部を流れる鶴見川、帷子川、大岡川等が一、二級河川に指定され、国、県の

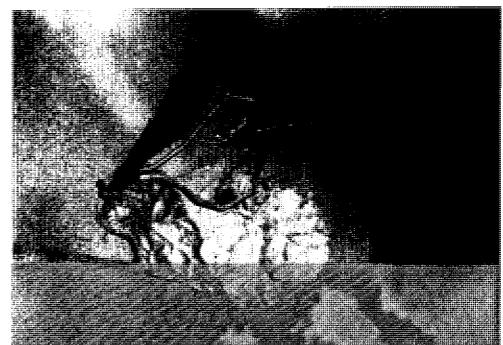
管轄下であり、市の自治が及ばないという問題点もある。まちづくりの視点から、河川計画の抜本的な見直しがある。

いい川をつくるには、前提として、流域の開発容量を決め、市域を越えて源流（鶴見川の源流は町田市の多摩丘陵）を保全し、谷戸や農環境とエコロジカルなネットワークを図りつつ、都市計画制度等を見直して、ゆとりのある河川空間を確保する必要がある。そういったことを射程に置きながら、当面の段階的かつ象徴的的事业として、鶴見川をモデルとする「川の駅づくり」を提案する。

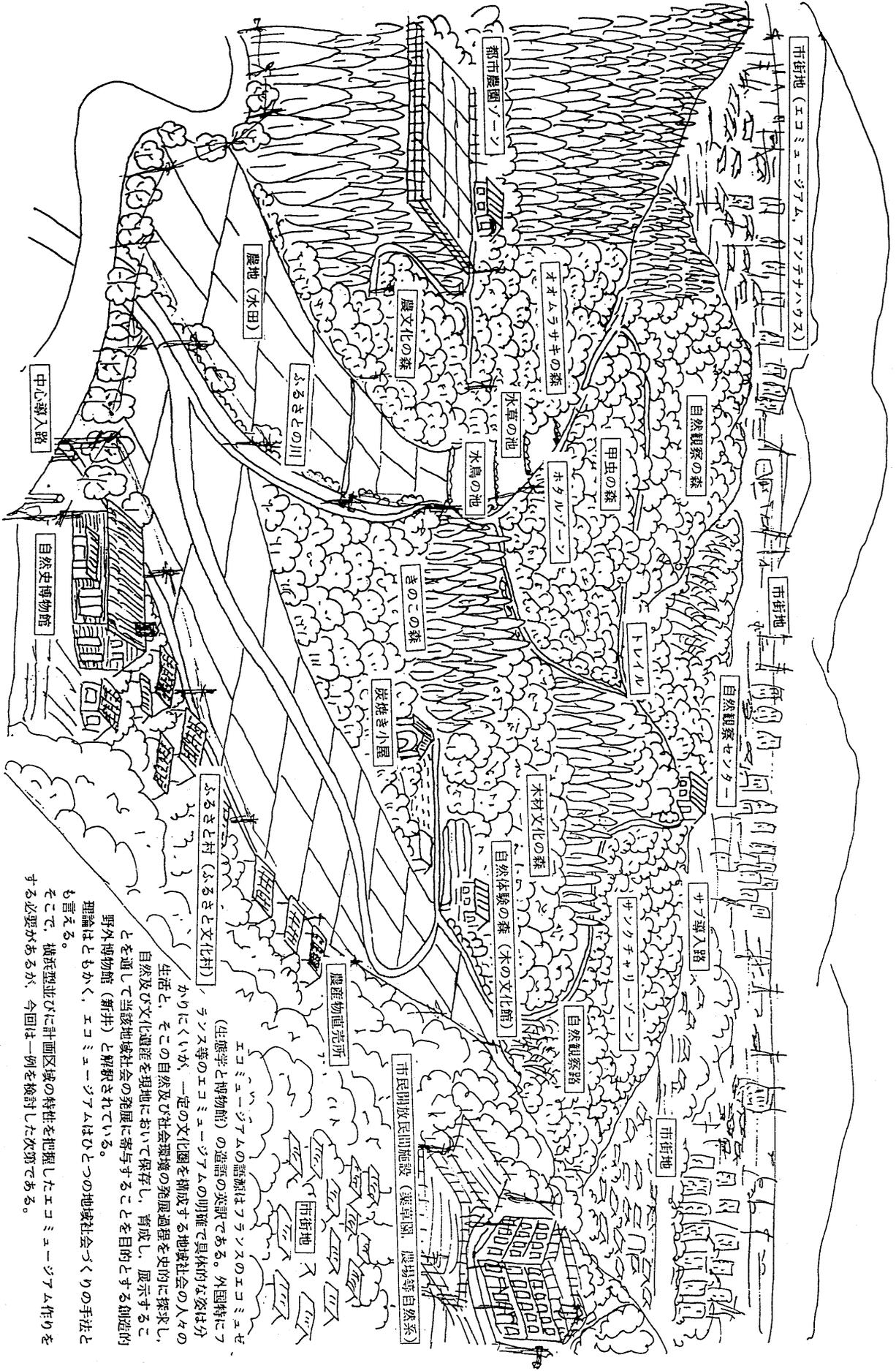
駅は、今では鉄道にしかないが、もともとは人や物資が行き交う街道や川の要所に置かれたものである。現代の川に駅を復活させ、新しい地域文化のターミナル拠点とする。そこは、自然度の高い水辺とするだけでなく、情報発信機能、交流機能、休憩機能などを備えた空間とし、デザインされた駅舎と駅員を配置する。駅員は、リバー・レンジャーやコミュニティ・リーダーなどとして活躍する。拠点ターミナルには、日本で最初の「都市河川博物館」もつくりたい。駅と駅との間には、「川の一里塚」（ポケットパーク）を配置する（図-4、5）。

実際の川の状態整備は、点で、長い年月をかけて行われている。点が線になり、線が面になるのは、遠い先の話になる。それに、その時の思想で、点と点が不調和ということにもなりかねない。川の駅づくりは、点にテーマ性をもたせ、少ない拠点整備でもともあれ流域文化軸としての機能を発揮できるようにしようという考え方である。

いつの間にかいなくなってしまったハグロトンボ



図一3 エコミュージアム構想図



エコミュージアムの語源はフランスのエコミゼ
(生態学と博物館)の造語の英訳である。外国特
ランス等のエコミュージアムの明確で具体的な姿は分
かりにくい。一定の文化圏を構成する地域社会の人々の
生活と、その自然及び社会環境の発展過程を史的に探求し、
自然及び文化遺産を現地に寄与することを目的とする創造的
とを連して当該地域社会の発展に寄与することを目的とする創造的
野外博物館(新井)と解釈されている。

理論はともかく、エコミュージアムはひとつの地域社会づくりの手法と
も言える。
そこで、被災型並びに計画区域の特性を把握したエコミュージアム作りを
する必要があるが、今回は一例を検討した次第である。

特集・行政課題研修④水と緑と野生生物をよみがえらせ豊かな生活都市をつくる政策

鶴見川にはすでに源流（町田）から上流・中流・下流にかけて二〇以上の市民団体が集まって「鶴見川流域ネットワーク」を結成し、新時代の鶴見川文化の創造に向けて、全国でもユニークな活動を展開している。川の駅、ハードと一体になればさらに大きな展開が期待できよう。

5 新規モデル事業

象徴的事業とともに、新しい計画のシンボルとなる五つの新規事業についての提案を紹介する。

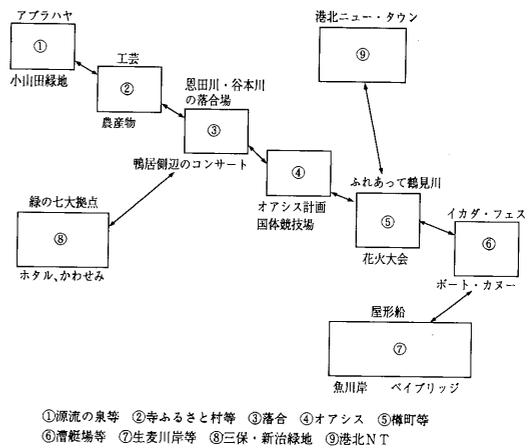
① 身近な水資源開発

水循環の回復、正常化は、エコシティの基礎条件である。現在、水道年間使用量と同量の雨水が、降雨時に一気に海に捨てられている。そのために、都市河川も洪水対策が余儀なくされ、排水路となっている。

自然面の減少に加え、都市のコンクリート化が進み、地中に雨水が浸透しにくくなっていることが大きな要因である。一九八七年の環境庁の調査では、横浜の透水性は四三％に落ち込んでいる。

生きものが河川で生息するためには、湧水が欠かせない。いったん地中に貯えられ、年間を通して水量・水温を安定させ、ミネラルを補給した湧水は、生命を育む母なる水である。透水量が減少すると、地下水位は低下し、湧水は枯渇する。さらに都市における透水面積の減少はヒートアイランド現象にも拍車を

図-4 「川の駅」イメージ



かける。

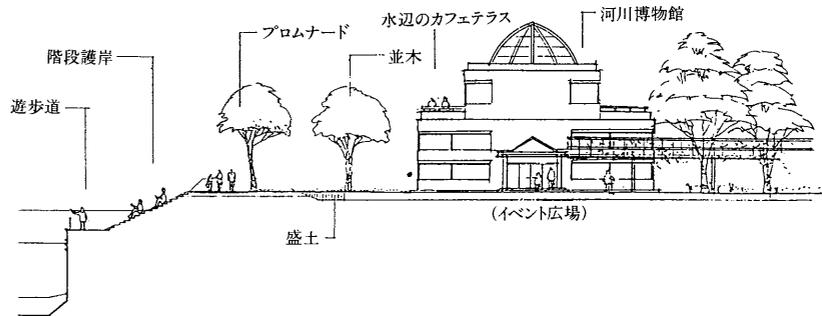
雨水を地下に浸透させ、水循環を回復させる（図-6）。透水性舗装、屋根雨水の地下浸透あるいは貯留、また水田の保全も重要な施策といえる。技術的、制度的にとくに困難な施策ではないが、なぜか横浜は後れを取っている。トンボ池を兼ねて現代の溜池（ミニダム）を造ってもおもしろい。巨大ダムや河口堰に依存した都市の構造やライフスタイルを改める必要がある。

キーワードは、これまでの都市のドライ化に対するウェット化である。

② エコ農業育成

都市のなかの水田、畑、里山、農道、屋敷林、農家などの農環境は、貴重な緑地として都市自然の骨格である。また、都市住民にとってはレクリエーション空間であり、「ふるさ

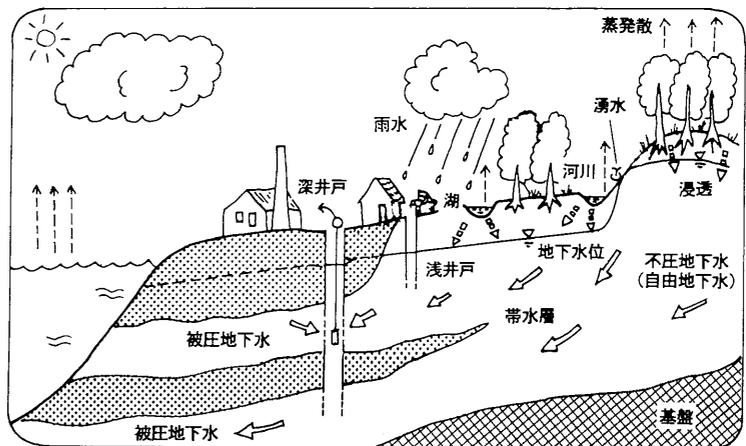
図-5 川の駅イメージ例



エコアップされた梅田川と念珠坂公園



図-6 地下水のすがた



と生物」のふるさとでもある。街中の生物たちも、産卵場所や食糧基地として水田を始めとする農空間に深く依存している。

さらに、エコロジカルな生産方法による農産品は、市民の生活を安全で豊かなものにする。エコ農業を育成することをエコシティ形成の支柱としたい。

③こくみ共生モデル地区指定

ロンドン子は、ビック・ベンの聴こえる処にキツネのいることを自慢している。ランドマークタワーの見える処にキツネやホタルのいる横浜を、浜っ子はもっと自慢してよい。この浜自慢をシンボルとした、キツネ(こくん)、オオタカ、ゲンジボタルなどの共生モデル地区を設定し拡げていく。国際都市横浜にふさわしい、グレードの高い「環境共生住宅」になろう。

④バイオトープ公園設置

エコシティの基軸となるエコロジカル・ネットワークの形成をめざす。緑の七大拠点を核に河川の源流域、生き物緑地を相互につないでいこうというものである。これまで点で散らばっていたこれらの環境拠点やバイオトープ公園を連携基地としてつないでいき、生物の生息環境を拡げていく。

生物種の供給基地(ジーンプール)としてバイオトープ・モデル公園を一区一か所以上つくる。このバイオトープ公園を増やして行くことにより、地域の生物拠点を点から線へさらに面へと拡げていくのである。幸い、横浜の公園には自然地形や環境を生かした公園が多

く、エコアップのポテンシャルは高い。バイオトープとしては、ホテル公園、トンボ公園、オオムラサキ公園など特色のあるものも考えられるだろう。

⑤エコアップ二〇一〇作戦

二〇一〇年までに二〇一〇カ所をエコアップする。地域のあらゆるところが対象地域となる。小中学校(約六百校)に五十〜百㎡の池をつくれれば、〇・五〜一キロメートルの間隔毎に池があることになる。

トンボ池は、大きさよりも、池間の距離が重要である。またトンボの好きな水草の豊かな池には、メダカ、カエル、ゲンゴロウが住みつき、チョウや野鳥もやってくる。トンボ池の候補地は、その他にも児童公園から総合公園、遊水地や調整池、ビルの前庭や屋上、庭園、そして休耕田等、無数にある。ギンヤンマつり、運動会の赤とんぼ、そんな原風景を、エコシティ・横浜の実現に先駆けて取り戻すことは夢でない(写真)。

この池を中心として、公園、河川、道路、官民施設もエコアップする。雑木林の再生、壁面・屋上緑化、ミニサンクチュアリも考えられる。

6 パートナリシップによるエコロジカルシティづくり

都市から自然が失われると、自然レクリエーションやレジャーでの市外流出が増大し、さらには巷をさまよったりする彷徨・放散行動が増えるという。そのミニマムの緑被率は三

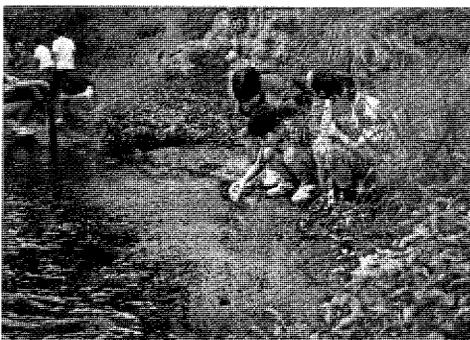
〇%と言われている(品田穰他)。市の「緑のマスタープラン」の目標値は、二〇%である。この目標値はこれで十分というよりも、せめてこれだけは、という数値であろう。実際、現状を分析すると、二〇%確保も困難な情勢である。

現状の自然は、水辺のコンクリート化や水質汚濁、樹林地の管理放棄や逆の過剰管理、あるいは農薬使用等によって、生きもの環境として理想的な環境ではない。エコアップすれば、相当の生きものが戻ってる。しかし、それだけではおそらくまだ珍品化したふるさと生物を、かつてのようにありふれた生物に戻すには不十分であろう。都市を再自然化し緑被率を四、五〇%の水準に戻す必要があるかもしれない。因に七五年の緑被率は四三%で、五〇%は七〇年前後の水準であろう。ドイツ等では、都市を再自然化し緑被率の増加に成功しているところもあるが、日本の現状では容易ではない。緑のマスタープランを前提としたのでは、テーマの野生生物と共生した豊かな生活都市は困難な課題かもしれない。さりとて緑被率の増加を正面に掲げれば、非現実的な夢のプランということになろう。

この生物環境のベースとなる緑被率をどう位置づけるかは、研修中、最初から最後まで引きずった問題である。初めにも少し触れたが、おそらく行政が判断する事項ではなく、市民自らが決定すべき性質のものかもしれない。それにしても機が熟していない。

各種アンケート調査や近年の市民の環境保全活動を見るに、いまは自然離れたライフスタイルが反省され、身近な自然や生きもの

三保小学校の子ども達による横浜産メダカの放流



に漸く目が向いてきた段階、言うなれば、『こころ』は自然を志向しつつも、『からだ』はまだ十分に付いて行けない段階といえる。

こういった状況下（制度等の不在も含め）で、「水と緑と野生生物をよみがえらせ豊かな生活都市をつくる」には、それを目指す市民・企業・行政のパートナーシップによる大きな環境ムーブメントがなによりも必要であろう。環境とかわる様々な運動や活動を含むムーブメントの盛り上がりがあったてはじめてエコシティへの展望が切り開かれる。

まず心構えとして、目指すべき方向性を明らかにする「エコロジカルシティよこはま」宣言を行う。宣言は、パートナーシップの精神にもとづいて起草委員会をつくり参加型で行う。

また野生生物にやさしい環境を創り管理していくエコアップを全市的な運動に広げていく。個人、グループ、事業所、学校それぞれ

取り組める内容は豊富にある。すでにホタルやトンボの里づくり、あるいは河川や雑木林の自然管理など、従来の自然保護活動とは一味違った環境活動が、広がりつつある。

エコアップ運動は、都市空間をエコアップするだけでなく、ライフスタイルをエコロジカルにする。環境教育・環境学習としても大きな意味を持っている。そういったエコアップ運動を含む市民・企業の環境保全活動を活性化させる行政のバックアップ・システムも必要である。

都市の環境は、市民・企業・行政みんなのものである。知恵のある人は知恵を出し、金や技術や資材を持っている人はそれを出し、時間のある人はそれを提供する。成員みんながパートナーとして協働する。イギリスではグラウンドワークとして定着しているが、横浜でもぜひ定着させたいシステムである。

△松本洋子〓環境保全局総務部総務課普及啓発係長／●森清和〓同環境科学研究所社会科学部門／*伊藤育子〓緑政局公園部計画課審査係（前同北部公園緑地事務所施設係）／

*藤田辰一郎〓同総務部企画課／*日置拓也〓

同農政部北部農政事務所農政係／*六浦勉〓

同農政部南部農政事務所緑化等担当係長

（前同緑政部緑政課緑地保全係）／*島村雅英〓

同公害対策部水質地盤課水質地盤係／小泉清〓

水道局浄水部水質試験所課長補佐水質第一係

長／*吉村伸一〓水道局河川部河川設計課

南部河川係／松井正幸〓交通局高速鉄道建設

部用地第一事務所用地担当係長（前都市計画

局計画指導部土地対策課）／*山口陽子〓建

築局宅地指導部宅地指導課事務係／海野洋子〓

衛生局港北保健所保健課保健係／村上恵介〓

緑区北部支所区政推進課区民相談室／*廣段

雄治〓下水道局南部下水処理場処理係長（前

企画財政局企画調整室担当係長）／*大久保智

子〓保土ヶ谷区戸籍課登録係長（前企画財政局

企画調整室）

△全体のとおりまとめは森が行った。